

九州大学

大学史料室ニュース

第21号

2003. 3. 31.

目 次

旧制福岡高等学校の思い出	2
九州大学西新教職員宿舎(旧制福岡高等学校 教職員宿舎)—沿革と居住状況—	4
九州大学大学史料室名簿	7
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



福岡高等学校(旧制)創立1周年記念式典

福岡高等学校(旧制)は1921年(大正10)11月、勅令第432号をもって当時の福岡市大字鳥飼字大坪(現九州大学六本松地区)に創設された(同校については、折田悦郎「旧制福岡高等学校と創立八十周年記念祭」『九大広報』27号を参照)。写真は福岡高等学校の創立1周年時(1922年11月18日)のものである。記念式典には文部大臣、福岡市長等から祝辞が寄せられたが、当時の九州帝国大学総長真野文二は来賓として祝辞を読んだ(写真奥壇上の人物が真野)。九州帝国大学と福岡高等学校(旧制)の密接な関係が窺われる写真である。

旧制福岡高等学校の思い出

伊 東 一 義

九州大学大学史料室から「史料室ニュース」への寄稿を依頼された。私の福岡高等学校(旧制)の思い出を書けということである。私は福高を出てからは東京帝大(当時)法学部に進んで、九大の同窓生ではないが、当時の私達には東大も京大も九大も(東北大、北大も同じであるが、地理的に親近感は薄い)同じように上級進路の一つであって、各大学への親しみは似たようなものであった。結果的に友人達も各大学に分散している。私達にはどの大学も母校のような気がするし、学生当時は各大学の教授たちに同じような関心を持っていた。

それに加えて、昭和25年の学制改革で、我が母校福高は九州大学教養部に移行した形になっている。福高資料もこの九大大学史料室に移管保存されて、後代に受継いでもらえることも有難い。またさる10月10日が福高は大正11年開設以来の創立80周年記念式典を同窓会(青陵会)で催したばかりである。感激新たな喜びに任せて、この原稿を書かせてもらっている。

いま、その福高創立80周年記念式について触れたので一言述べておきたい。この文章を読まれる皆さんから見ても、廃校になって今や存在しない学校の創立記念式など、滑稽な、老人たちのセンチメンタルな行事とか遊びに見えるかも知れないと思うからである。当然祝賀式典の私たちも、この指摘には一応同感するに吝かではなかった。その日の式典で、物故・戦没同窓生への追悼の辞

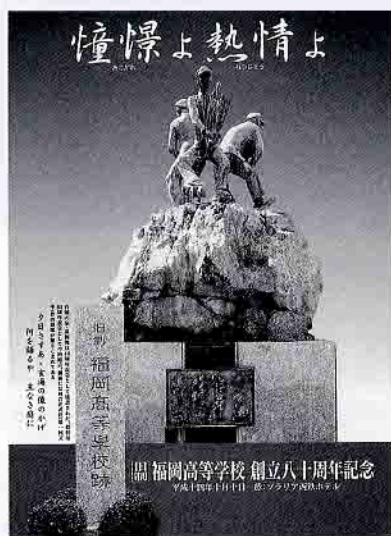
を読むことになった私も「存在しない母校の創立祝賀など、論理矛盾、撞着の感なきにしも非ず、との思いはわれわれ自身にもありますが、それは逆に、亡き母校への愛惜の深さの現れであり、母校福高はわれわれの胸の中に厳然として生きております」と述べた次第である。

要するに、旧制高校は、廃止になったのが今に至るも悲しいほど素晴らしい学校制度であったと主張したいのだが、それが何故、廃止への歩みを辿ったのか。それについては丁度いいところで、2002年春、「学士会会報2002-Ⅲ号」で森川英正先生(元慶應義塾大学大学院教授・東大・経博・経・昭29)の学士会午餐会における講演要旨が掲載されているのを興味深く読ませてもらったのを思い浮かべる。以下この森川先生の調査と一部にはご意見も引用させて戴くことを、どうぞお許し下さい。

さて、旧制高校を含む戦前の学制「6・5・3・3制」が廃止されて現在の「6・3・3・4制」に移行するのが本決まりになったのは昭和23年である。それは当時占領軍の意向が昭和22年に第一次アメリカ教育使節団の報告書の形で伝えられ、それを日本の文部省がこれに応じて動き、関係大学、高等学校、専門学校等も結局はこれに応じて、学制の新編成がなされたとする経過については概ね異論はないと思う。

さきに「旧制高校は、廃止になったのが今に至るも悲しいほど素晴らしい学校制度であった」と私や友人たちの感想を述べたが、それなのに、その当時、一部学校の強硬な反対とか、あるいは学生側の反対ストとかもなく、この学制改革=旧制高校廃止が決定したことは果たして何によるものか。

基本的には占領米軍の方針が強い圧力になったことは否定出来ないだろうが、私はやはり、旧制高校を中心の柱とする学校制度は、当時の高校が同年齢層の0.5パーセントしか収容出来ていなかったという“数の行き詰まり”だけで見て、もはや時代の要請に 대응する学制ではなくなっていたと考える。敗戦で壊滅したとは言え日本経済の拡大と進学人員の拡大は、この旧制高校中心の学制を乗り越えてしまったと考える。それに時代は何よりも民主化が中心の時代であった。民主化は



旧制福岡高等学校創立八十周年記念パンフレット

数の問題でもある。

まず東大と一高、次いで各帝大と地元の旧制高校の間で、文部省の意向の通りに学制の柱が出来上がった。一番辛い思いをしたのは各帝大所在地でない高校であったと思うが、そこでは各地域の専門学校等と合同して、各地域の大学として結集するという、文部省の各県一大学の構想で埋められて行った。

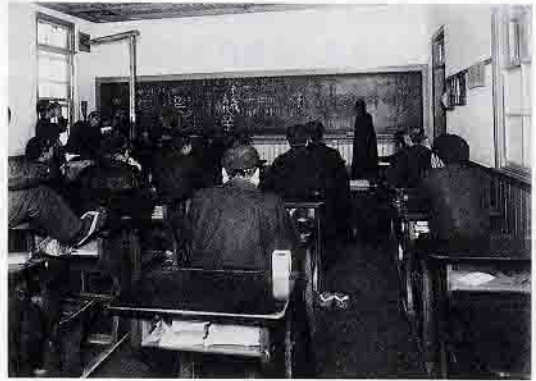
その新学制になってから50年。新学制は安定した歩みを続けているだろうか。このところ再び大学改革待望論が目につき、聞こえる気がする。あるいは声高い警鐘として、あるいは沈痛な憂いの声である。あれだけ愛惜の思いがあった旧制高校を捨てて、新学制への移行を受け入れた私たちも、何か看過できない思いで80歳の耳をそば立てている。

その大学論は多様である。学生が勉強しない。それは時代の流れのせいもあろうが、大学の教科自体に問題がある。学問の進歩はよいが細分化に過ぎている。もっと概論的に学問の体系に導き入れてくれる講義が必要だ。いやもっと簡単なところに問題がある。旧制高校的な基礎教養の積み上げが必要なのに、ジュニアコース的なものとして発足当時計画された教養部課程は削られて行くばかりだ。学生が勉強しないのは分からないからだ。大部分は理解することを諦めている。等々。私事を述べて恐縮だが、実はある大学理系に入った私の孫の話が私を強くとらえて、事をオーバーに考えさせているという反省もあるのだが、どうも本質をついている気もする。

また別途の大学改革論も声高い。「6・3・3・4制」では機能不足だ。大学院も加えて大学は完結するのだという考え方もあり、少なくとも現在の大学の状態に対する著しい不満感、それは危機感の域に高まっていると感ぜられる。もう一つ別の動きであるが、やみくもに各県一大学を推進して大学レベルの低下を招いた文部省側の反省から出た地域大学への再編成の動きもある。

以上いろいろの問題指摘がある中で、もう一度さきの森川英正先生の提起されている「リベラルアーツ大学の提議」は、何か重要な示唆を与えている気がする。もう一度、あの論考を読んでみられることをお勧めしたいと思う。

思わぬ横道にそれてしまっ、私の「福岡高等学校時代の思い出」に触れる紙面もなくなったようである。ごく僅かだが思い出の一部を述べさせて戴く。



教室風景

私は昭和15年4月に入学した。文科甲類である。私の手許に残る三年間の学業成績通知票がある。一年は修身、国語、漢文、第一外国語1、2、3、第二外国語、東洋史、地理、自然科学、数学、体操。二年は、第二外国語まで同じ、日本史、西洋史、心理及論理、法制及経済、自然科学、体操。三年は自然科学に代わって哲学概説。それにこの三年の時から新たに教練が教科に加わっている。一、二年のときも教練はあったが教科ではなかった。軍隊権力の侵入が示されている。

三年間の教科としてはゆったりとした編成だったと思う。週12時間の第一外国語も、詰め込まれた思いはなく、トーマス・グレイの『墓畔の哀歌』やキーツの詩などゆっくり朗読して韻を味わうことから教えて下さったし、逆に第二外国語のドイツ語は、二年の終わりにはマンの『トニオ・クレエゲル』がどうにか読めるくらいには教えてもらった。国語の授業も、ゆっくり国文学を味わうことを習った。萬葉集から始まったが、「こもよ みこ持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岳に 葉つまりす兒 家きかな のらさね…」と朗読される先生に萬葉の世界への眼(耳)を開いてもらった思い出がある。この余裕のある教科編成を、ゆったりした速度と内容で教えて戴き、またこちらも取り組む。教科から離れて余分の時間は古典から必須と言われる一般教養書まで、それこそ「高等学校に入って本も読まんで何ばするか」と先輩たちからたたき込まれた読書による自己修練があった。

そして残るもう一つの柱は運動部活動である。原則として全員が何かの部に所属する。そしてその部活動は真剣で激しかった。私は弓道部。初心者で参加し、二年の後半からは選手となった。弓道は的中率がすべてではないが、20射中15本くらいの的中率に達していた。それなのに二年の夏(昭和16年)のインターハイの突然の中止に涙をのんだ。

ソ満国境の関東軍に兵力を動員集中するための“関東演”に一切の輸送力が動員されるためであったのは戦後に知った。

このように、一見平穏で何も変わらぬかに見える表面に較べて、戦争は次第に私たちの高校生活に侵入して来た。昭和15年11月校友会が解散され報国団結成、昭和15年12月寮も学而寮が報国学而寮と改称され、学園の自治と自由の旗幟が下ろされる。昭和16年12月太平洋戦争開始。このあとの動きは急である。昭和16年11月の文部省令81号により繰上げ卒業（19回生6ヶ月短縮、以後21回生まで）。昭和18年1月勅令38号により修業年限2年に短縮。昭和18年12月学徒出陣。

この学徒出陣は満年齢19歳に引き下げられた徴

兵年齢と合わせ、文科系大学生と理系の一部のほぼすべて、中には高等学校生徒にも及び、福高21、22回生も多数が入隊した。入隊して初めて分かる戦況はまさに敗北寸前。この危機に立つ祖国のためにはと、私たちも一身を捧げて悔いない思いであった。この学徒出陣組の中から多くの友が還らなかった。私のクラス（40名）でも戦死5名、うち2名は特攻隊員であった。

今や60年を過ぎた昔になったわが青春の福岡高校時代をふり返るとき、それはなんと美しく、そしてかくも悲しい思い出を秘めているか。いまの学生たちには再びこの戦火に脅かされない平和な学園生活であり続けることを祈っている。

（青陵会会員）

九州大学西新教職員宿舎（旧制福岡高等学校教職員宿舎） —沿革と居住状況—

角 田 憲 一

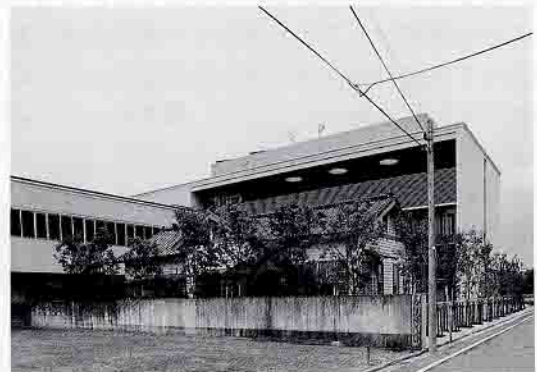


福岡市広域図

* 『1：200,000地勢図』（国土地理院 平成14年）をもとに作成

現在「九州大学国際研究交流プラザ」となっている辺りには、つい最近まで6棟の教職員宿舎が残されており、樋井川沿いに2階建ての洋館2棟が立ち並ぶ姿にはどこか昔懐かしい雰囲気が漂っていた。

九州大学西新教職員宿舎と呼ばれたこれら6棟の建物は、旧制福岡高等学校に勤める外国人教師と日本人教職員のための宿舎として建設され、旧制福岡高等学校が九州大学へ移行するとともに九州大学の教職員宿舎として引き継がれたものであ



「九州大学国際研究交流プラザ」と保存建物

た。現在の地番は、福岡市早良区西新2丁目16番、樋井川沿い西岸にあって、和風建物3棟（2棟は大正13年建設、1棟は大正期の建物が焼失後昭和28年に再建）と、洋風建物3棟（2棟は大正13年、1棟は昭和2年建設）の計6棟から成っていた。平成11年、建物の老朽化など種々の事情により使用停止となり、平成12年には洋風建物1棟を除く5棟が取り壊された。

これら宿舎の建築的特徴やその設計者に関する問題については、先の、「倉田謙と九大キャンパス」

『九州大学大学史料室ニュース第15号』（福田晴慶教授）において既に報告されているので、今回はこれらの宿舎が建てられていた敷地、建設当初からの宿舎の沿革、及びそこに居住していた人々に関する事柄について若干の考察とともに述べてみようと思う。

明治33年当時の地図を見ると樋井川の川幅は現在よりも河口付近で大きく広がっており、西新宿舎の敷地は見当たらない。大正14年の地図においては樋井川の川幅は現在とほぼ同じになっていることから西新宿舎の敷地は埋立地であることが分かるが、埋立の経緯や正確な時期についてはよく分かっていない。大正2年頃に今川橋附近から埋立工事が開始され、工事が進むにつれ河口東岸は電車会社の催す納涼場に、西岸は住宅地となつたらしい。当時この埋立地の地名は「汐入」といい、宿舎は「汐入官舎」とも呼ばれていた。その後、平成元年になると「よかトピア・アジア太平洋博覧会」の際の大規模な埋立てにより海岸線は約700m沖に移動し、宿舎の周辺環境は大きく様相を改めた。

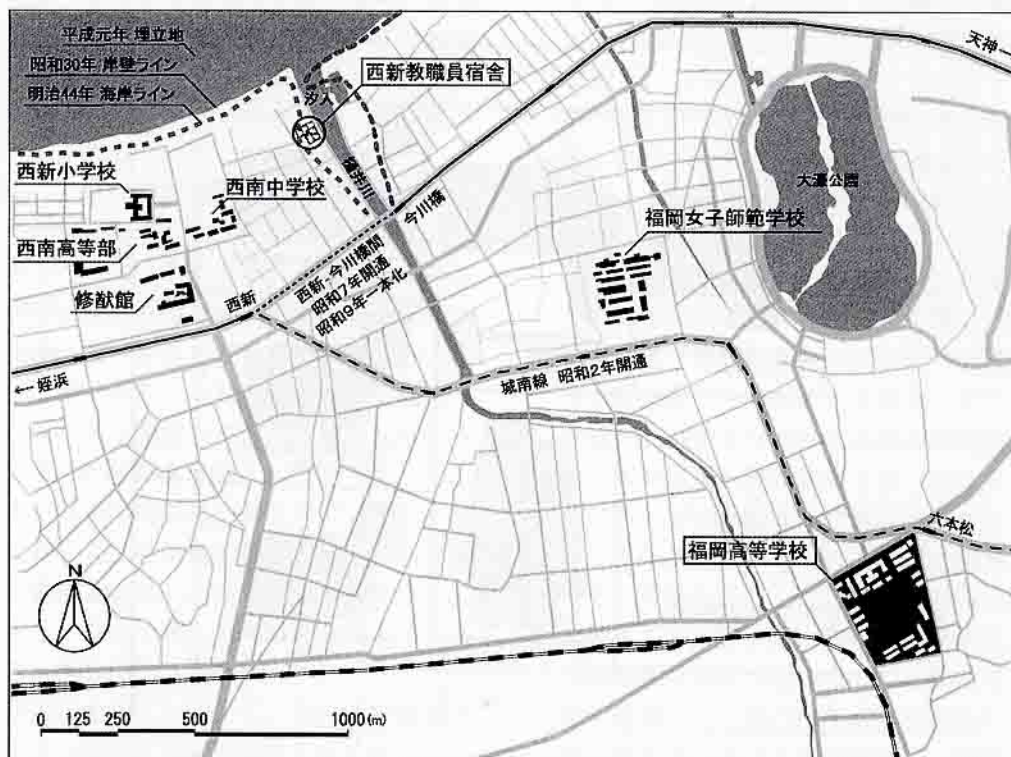
次に宿舎建設前後における敷地周辺の市電敷設状況について見てみると、宿舎建設以前には既に今川橋と東の九州大学をつなぐ路線、西新町と西の姪浜をつなぐ路線が開通している（今川橋と西

新町の間約300mはまだ繋がっておらず、これが繋がるのは昭和7年のこととなる）。最初の5棟が建設された大正13年当初は、いわゆる城南線（西新一渡辺通り間）は開通していない。宿舎から福岡高等学校がある六本松への通勤は不便であったと思われるが、6棟全て完成した昭和2年には城南線も開通し、西新宿舎からの交通は東西南方面のいずれにも便利なものとなった。宿舎の敷地選定の際にはこれらのことも考慮されたと考えられる。

また、現在この附近は、西新小学校、修猷館高校、西南学院などが設置されており文教地区としての性格を色濃く持っているが、これら教育施設の大部分は西新宿舎設置以前に、明治から大正初期にかけて設置、もしくは他地区から移転したものであり、宿舎が建設された時には既に文教地区としてのアカデミックな地区の性格を確立していたと考えられる。

以上のことから西新宿舎の立地は、自然環境に恵まれ、市街への交通の便も良く、またアカデミックな地区としての性格を有しており、当時のエリート学校であった福岡高等学校の教職員宿舎を設置するにふさわしい住宅地であったと考えられる。

このような地区としての特性をもつ敷地に、福岡高等学校の教職員宿舎6棟は建設される。福岡



西新地区変遷図（鉄道・埋立・教育機関）

* 『1：10,000地形図』（国土地理院 昭和33年）をもとに作成

高等学校は大正11年に開校するが、その2年後の大正13年には日本人教職員宿舍第1号・第3号棟、外国人教師宿舍第1号・第2号棟が、昭和2年には外国人教師宿舍第3号棟が、昭和28年には日本人教職員宿舍第2号棟が建設される。この日本人教職員宿舍第2号棟は、一旦火災で焼失したらしい。『青陵 思い出の記』(青陵会：1972)の中には、この宿舍が昭和20年の福岡大空襲により焼失したとの記載があり、九州大学管財課所蔵の昭和23年度末当時の建物配置図ではこの場所には「全焼」との書き込みがある。先般取り壊された宿舍は、その後昭和28年に再建され学長宿舍として使用されたものであった。

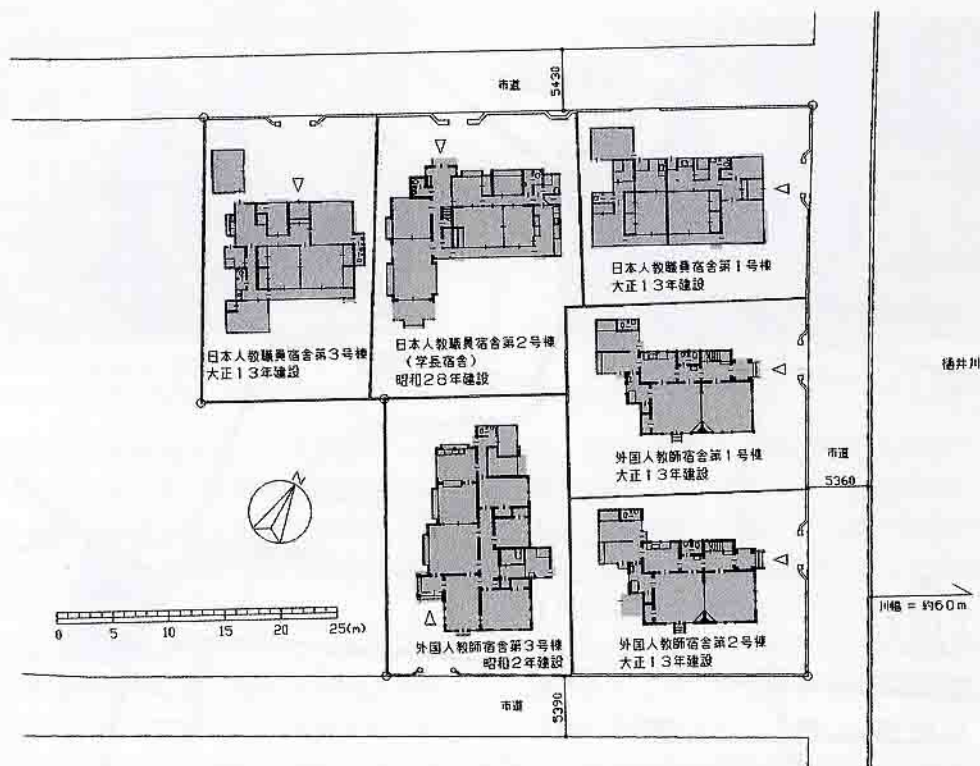
この間昭和25年に福岡高等学校は廃止となり、九州大学第一分校に移行したが、これにともない西新宿舎6棟は「分校宿舍(二)」として福岡高等学校から九州大学第一分校に所属替となる。また昭和38年分校が廃止され九州大学教養部が設置されるとともに九州大学へ整理替される。その他にも幾度かの「用途変更」がなされたとの記録もあるが詳細については明らかではない。

また福岡高等学校が所有していた官舎は西新宿舎だけではなかったらしく、『福岡高等学校一覧』(九州大学大学史料室所蔵)の第6年度版(自昭和2年至昭和3年)には、「官舎」として第1号

から第7号が挙げられており、これらの「位置」(住所)としては第1号が福岡市地行西町、その他第2～7号までの6棟が福岡市西新町汐入にあったことが確認できる。このことは九州大学管財課所蔵の資料でも確認することができ、西新宿舎6棟は「官舎(二)」[福岡市西新町汐入2064-3番地：第2号～6号/2064-5番地：第7号]と記され、ほかに「官舎(一)」[福岡市地行西町79-3番地：第1号]なる建物が確認できる。この西新町汐入というのが当宿舍群にあたり、「官舎(一)」[第1号]は樋井川をはさんで向かいに建てられていたと考えられるが、建物の正確な位置など詳細は確認できていない。

西新宿舎の居住者やその使用状況などに関する直接的な記録は現在のところ見つかっていないが、『福岡高等学校一覧』、『外国人教師契約書綴 福岡高等学校』(以上九州大学大学史料室所蔵)、『青陵 思い出の記』、『あ、玄海の浪の華 福岡高校史』(作道好男、江藤武人：1969)などには宿舍及び居住者についての記述を散見することができるのでこれらをもとに若干の考察を試みたい。

前述のように西新宿舎には福岡高等学校に勤める外国人教師や日本人教職員が居住していた。福岡高等学校には外国語として獨語科、佛語科、英語科の3科目があり、外国人教師はその在任期間



西新教職員宿舍 配置図

に多少のずれや重なりはあるものの、基本的に各科目1名ずつ常時3名が充当されていたようで、外国人教師の内、その半数については当宿舎のいずれかに居住していたことが確認できた。しかし、残る半数についてはこの宿舎に居住したのかどうか判然としない。少なくとも以前から神父として福岡市に在住していた1名のみは教師任官後も当宿舎に入居していないことが分かっている。このことに関して『外国人教師契約書綴 福岡高等学校』には、契約期間・賃金に関する記載とともに、「教師館」ないしは「舎宅」貸附の記述が見られ、「福岡高等学校ノ貸附スル舎宅ニ居住スヘシ但シ貸附セサルトキハ・・・」と記載されている。以上のことから、基本的に外国人教師は当宿舎のいずれかに居住することになっており、実際にも居住していたのではないかと考えられる。

また、和風宿舎には福岡高等学校に勤める日本人教職員の一部が入居していたとの記録がある。『青陵 思い出の記』のエピソードの1つには、「父が生徒主事になった関係で、荒戸町から百道の浜辺にある汐入二号官舎に移り住むことになった。」という記述があり、前後の記事から判断すると、この汐入二号官舎とは敷地北東角に建つ日本人教職員宿舎第1号棟であると考えられる。また、『福岡高等学校一覧』において居住が確認できた日本人教師の役職をみると、教頭の吉村友喜を筆頭に皆要職に就いており、福岡高等学校時代には要職の教師がここに住むことが多かったようだ。

また、『青陵 思い出の記』には、外国人教師や日本人教師についての思い出とともにその住まいである宿舎の思い出も多く綴られており、当時の西新宿舎の様子を垣間見ることができる。教師は積極的に学生を自宅へ招き、学生もその招きに応じ（招かれずとも押しかける学生も多々いたようだが）よく足を運んでいたようで、一時期外国人教師宅に下宿していた学生もいたらしい。これらのことから福岡高等学校における教職員宿舎は、学外における教師と学生の交流の場であり、重要な教育の場の1つであったことが分かる。

これら西新教職員宿舎6棟のうち5棟は前述のように取り壊しとなってしまったが、残る1棟（外国人教師宿舎第3号棟）は、平成13年3月、「九州大学西新外国人教師宿舎第3号棟」として、福岡市有形文化財の指定を受け、新設「九州大学国際研究交流プラザ」の一部として保存・再利用された。このことについては、平成15年3月に『福岡市指定有形文化財 九州大学西新外国人教師宿舎第3号棟修理工事報告書』を刊行予定であり、この報告書の中では、取り壊しとなった5棟の建物についてのより詳しい記録・報告も行なっているので、ご参照願えれば幸いである。

（九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻
山野研究室 博士後期課程）

九州大学大学史料室名簿

室長	副学長	有川 節夫	兼任	法 院 助教授	熊野 直樹
副室長	人環院 教授	新谷 恭明	〃	経 院 教 授	萩野 喜弘
専任	助教授	折田 悦郎	〃	石 炭 研 教 授	東定 宣昌
兼任	人文院 助教授	佐伯 弘次	事務補佐員		松尾 陳代
〃	比文院 教授	有馬 學	〃		筑紫 啓子
〃	法 院 教授	植田 信廣			

(2003年3月1日現在)

受贈図書一覧 (2002年11月～2002年12月)

別冊宝島90 大学の事情

石井慎二編 1989. 3

日本的な、余りに日本的な 東京女子大学哲学科
紛争の記録と分析

林道義 1992. 6

中世の大学

ジャック・ヴェルジェ著 大高順雄訳 1979. 9

京都大学大学文書館研究紀要 第1号

京都大学大学文書館研究紀要編集委員会

2002. 11

駒澤大学百二十年 過去からいま そして未来へ 駒澤大学開校百二十年史編纂委員会	2002. 10
早稲田大学史記要 第三十四巻 早稲田大学大学史資料センター	2002. 9
金沢大学五十年史 通史編 金沢大学50年史編纂委員会	2001. 8
佛教大学 10年の歩み 佛教大学史編纂委員会	2002. 10
佛教大学報 第52号 竹内明編	2002. 10
学院史料 Vol.18 神戸女学院史料室	2002. 10

佐世保高専四十年誌 1992-2001 佐世保高専四十年誌編集委員会	2002. 11
菊葉 第四十一号 菊葉編集委員会	2002. 11
愛知県公文書館だより 第七号 愛知県公文書館	2002. 12
情報の保存と活用のためのJHKダイレクトリ 2002年版 情報保存研究会	2002. 10

* 掲載したのは受贈図書の一部である。

大学史料室日誌抄録 (2002年11月～2002年12月)

- | | |
|---|---|
| 11. 5 (火) 大高順雄大阪大学名誉教授より郭沫若(本学医学部卒業生)の件につき照会、史料送付。 | 11. 28 (木) 防衛大学校より大学史料室視察のため来室。 |
| 11. 7 (木) 国際交流課より史料調査のため来室(11月21日も同様)。 | 11. 30 (土) 九州大学公開シンポジウム「人類の遺産—文書・記録の保存と利用—」開催(新谷副室長パネラーとして参加)。 |
| 11. 14 (木) 朝日新聞社記者、取材のため来室。 | 12. 4 (水) テレビ東京より初代総長山川健次郎の件につき照会、史料送付。 |
| 11. 15 (金) 折田助教授、2002年度大学史研究会セミナーに参加(～17日。於明治大学)。
森祐行大学院工学研究院教授より史料寄贈(11月27日、12月26日も同様)。 | 12. 6 (金) 第3回センター地区基本設計合同検討会議(折田助教授出席)。 |
| 11. 21 (木) 福岡市立箱崎小学校5年生(13名、ほか引率者2名)、大学史料室及び本学箱崎地区見学のため来室(折田助教授、九州大学創立と地域との関係等につき説明)。 | 12. 7 (土) 有川室長、新谷副室長、折田助教授、白石寛治総務課専門職員、第2回大学アーカイヴズ研究会に参加(～8日。於京都大学大学文書館)。 |
| 11. 25 (月) 『医学部百周年記念写真集』編集会議(於大学史料室。12月2、11、18、25日も同様)。 | 12. 16 (月) 濱田耕策大学院人文科学研究院教授、金容徳ソウル大教授、史料調査のため来室。 |
| | 12. 24 (火) 青陵会(旧制福岡高等学校同窓会)より史料寄贈。 |

九州大学大学史料室ニュース 第21号

発行日 2003年3月31日(年2回刊)

編集
発行

九州大学大学史料室

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

電話・FAX (092) 642-2292

Archives of Kyushu University

印刷 (株)ミドリ印刷